

科目区分：中等教育コース（音楽教育専攻）  
授業科目名：声楽(4)（歌唱指導を含む）

## 学習課題設定と自己改善への取り組み

音楽教育講座・木村 勢津

### I 授業の概要

#### 1.目的

音楽科教員として、よりよい範唱を提示できるための歌唱技術の修得と児童・生徒の歌唱における問題点を的確に把握し、その改善方法を提示できる能力の育成を目的とする。

#### 2.到達目標

- (1)原語で芸術性豊かに歌唱できる。
- (2)歌唱する楽曲について、具体的に自分が考える理想的歌唱を述べ、他者にわかりやすく説明できる。（プログラムノートの作成を含む）
- (3)歌唱表現における自己の問題点を整理し、その解決方法について考えることができる。
- (4)他者の歌唱における問題点を指摘し、その解決方法を提示できる。

#### 3.授業の位置づけ

本授業は、中等教育コース音楽教育専攻の3年生を対象として開講されている。カリキュラムマップ上では基礎・展開・応用のうち、応用の科目として位置づけている。1年次に理論を学び、歌唱のための基礎技術を修得した後、2年次と3年次前期に中学校や高等学校で歌唱教材として扱われる日本の歌や諸外国の楽曲の歌唱演習を通じて、楽曲に対する取り組み方を学び、個々の歌唱上の課題を探求する。教育実習終了後の3年後期に開講される本授業は、音楽教育専攻生に開講される声楽領域の最後の選択科目であり、集大成的位置づけにある。

なお、平成28年（2016）度の改組後、科目名に歌唱指導を含むの文言が加えられ、初めて開講された授業である。

#### 4.受講者数と受講生の状況

選択科目として開講されている本科目の

受講者は4名で、音楽教育専攻の3年生全員に当たる。内3名は、1年次の必修科目「声楽基礎（合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む）」から「合唱」を除く声楽領域の全ての開講科目を受講し単位を取得しており、他の1名も3年前期1科目を除き受講している。

#### 5.授業運営の方針授業展開

本授業では、①受講者自らが課題意識を持ち、授業に取り組める工夫 ②教師のみならず、3年間共に学んだ受講者の客観的な意見を反映し、範唱の工夫と改善を行える環境設定の2点に留意し、授業運営を行った。

授業開始前に教育実習での体験を振り返り、今後教育現場に立つために、本学在学中に修得したい歌唱技術や歌唱表現について、個別にまとめさせた。第2回目の授業以降、各自が設定した学習テーマならびに目標に沿って13回の授業計画を立案し、この計画を基に授業を展開した。その結果、受講者全員が目標を弾き歌いによる歌唱力の向上に設定し、課題として自己の歌唱力、歌唱指導力を挙げた。選択した楽曲は、中学校、高等学校で扱われる歌唱教材が中心で、課外活動で歌唱される合唱も含まれていた。

### II 授業研究の取り組み

#### 1.自己の歌唱における課題の明確化

児童・生徒が歌詞の表す情景や気持ちを想像し、楽曲の雰囲気を感じ取り、思いをもって歌唱するための支援として、教師による範唱（模範唱）は重要な役割を果たすものである。また、教師を目指す音楽教育専攻生にとって、歌唱技能の修得と向上ならびに豊かな歌唱表現力の育成は強く望まれるものである。その重要性を受講者自らが認識することが重要であると考え、前述のとおり、本授業の到達目標(3)に明記した。

本授業では、個別指導で受けた内容をまと

めること、次回の授業で指導を受けたい内容、他者が受けた印象や他者からアドバイスをどのように自己の研鑽に生かすかについて、毎時、Moodle を用いて作成する受講票に記入することとし、受講日前日までに提出することを義務付けた。このことにより、受講生は自分の課題を明確にして授業に臨むことができ、また授業者は、事前に課題を把握することにより、授業を焦点化し、効率的に指導が行えると考えた。

## 2. 他者の演奏に対する評価の反映とコミュニケーション能力の育成

個別指導冒頭では、必ず楽曲を通して演奏することとし、他の受講者から聞きたい意見などについて、予め受講者全員が共有する形で授業を展開し、演奏後、意見聴取やディスカッションを行い、自分の感覚と他者の感覚との相違点を認識できるようにした。また、自分の意見を演奏者や他の受講者に理解してもらうためには、専門知識の修得の重要性や端的に表現するための工夫が必要であることを認識できるよう、できるだけ多くの発言機会を提供しようと考えた。

## 3. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

授業者は、愛媛県教育委員会から依頼を受け、平成 19 年度より今日に至るまで、愛媛県内の小中学校において、日本の歌を中心とした演奏活動を行い、児童・生徒への歌唱指導を継続的に行っている。すでに 100 校以上の学校でこの活動を実施した経験から、大学で担当する声楽領域の教育活動において、範唱の力を育成すること、とりわけ弾き歌いができる力の育成の重要性を強く感じている。さらに、児童・生徒が楽曲に対する興味・関心を抱ききっかけは、指導者の歌唱教材や鑑賞教材に対する造詣の深さが関係すると考えている。そこで、平成 28 年（2016 年）度の改組に当たって、楽曲に対する造詣を深めるための学びとして、1 年次より歌唱楽曲のプログラムノートの作成を継続的に行わせており、本授業では、読者を具体的に設定（校種・学年など）して作成させた。プログラムノートの作成は、歌唱する楽曲について、詩ができた背景、作曲者の思いや意図など曲に対する様々な情報を収集、選別する行為を通して、

歌唱者の立ち場から聴き手に発信するメッセージとしての概念を育成できる。文章で自分の考えや思いを他者に伝えるという点で、大学の教育活動において、有用となるものと考えている。また、教育現場においても、自分が得た情報をどのように消化し、児童・生徒に分かりやすく伝えることができるかは指導力に関わる能力であり、プログラムノートの作成を 1 年次より 3 年次まで継続的に体験することで、指導力の育成にも役立つものと考えた。

また、教育実習を経験した学生は、教育現場では弾き歌い能力を有することの重要性を感じ得るであろうという観点から、この能力の育成と伸展を課題と認識し、取り組むことを願って 3 年間のしめくくりとし、課題の設定を受講者に委ねるカリキュラムを構築した。

## III 授業評価の方法と結果

授業評価は、受講票および授業終了時に行った記述式アンケートと DP 対応調査の結果に基づき行った。

### 1. 自己の歌唱における課題の明確化

授業終了時に実施した記述式アンケートより

#### 【設問】

個別指導の学習内容を受講票にまとめることは有意義でしたか。あまり効果的でなかったですか。率直な意見とその理由を教えてください。

#### 【回答】

A:まとめることで、自分が改善すべき点が具体的に把握できたことが良かった。しかし、楽譜等へ書き込んだことをまとめるといったことが中心だったので、受講票にまとめる意味があったかよく分からない。

B:なかったとしても自分なりに整理ができていたため困ることはなかった。でも、毎回の授業の振り返りと次の授業への課題を見据えるという点でわかりやすく、意欲をもって授業に取り組むことができた。

C:有意義だった。自分が今回学んだことを書き出すことで理解したことや次の自分の中で整理することができた。

D:学習したいポイントだけでなく前回の課題をまとめたり、次の授業での目標を記入することによってその目標や課題改善に向かって練習に取り組むことができた。

### 【設問】

毎回の授業で学習したいポイントを事前にまとめてもらいましたが、この方法で良かった点と改善点はどのようなことでしょうか。

### 【回答】

A:授業前にポイントを絞ることができ、濃い指導をうけられた。また、自分もどのように取り組みたいかが明確になった。

B:学びたいことを先生と共有出来る点では良かったと感じます。

C:まとめることで自分の課題が分かる。あまり効果的でなかったこととして、その他のポイントにふれられない点。ポイントとして毎回同じようなことを書いてしまう点。

D:学習したいポイントをまとめることで、その部分に特化した指導を受けることができた。

### 【結果と今後の課題】

受講者は、課題を明確にして授業に臨むことの成果として、自分が取り組むべきことを明確にできたと感じている。授業者は、前時に学習した内容を振り返り、まとめることによって課題が明確化され、次の授業の目標を設定できると考えたが、受講者の中には楽譜などに記入することで理解に達しており、受講票に記入することの煩わしさを感じていることが分かった。振り返りの意味と重要性の認識について、さらに理解を深める教育の必要性を痛感した。また、受講者の習熟度により、学習のポイントが定点化している現実も見えてきた。課題設定の方法、授業全体における課題設定の回数などの工夫が必要である。

## 2. 他者の演奏に対する評価の反映とコミュニケーション能力の育成

他者の評価に関連する問いは、受講票において幾度か行った。代表的事例の一部を表記する。

### 【設問】

学習指導要領に則したあなたの歌唱（弾き歌いの範唱）について、他者からのコメントや個別指導の内容と照らし合わせ、今後、どのように自主学習を行うことが望まれるかまとめてみましょう。

### 【回答】

A:自分が考えていたことではないことが他者にとっては印象的だったということがわかり、自分が相手に伝えたいことをもっとはっ

きりと持ち、大胆に他とは変化をつけるということが重要だと思った。その際、様々な方法がある中でどのような手段で強調させるのがよいかを選択することと、歌詞に合った表現をすることを意識したい。また、前提として歌詞をはっきりと発音することと曲の拍子感を感じることも気を付けたい。一方で、自分と他者で印象的な部分が異なるというのも悪いことではないと考えるから、それぞれのフレーズにおいてどのような良さがあるのかを考えてから歌いたい。

B:〇色からイメージを膨らませていくなど、楽曲に対するイメージを持つ手段をたくさん持てるようにすること。どのようにイメージしていくのか様々な方法を考えてみたい。

〇1番から3番まで、表現の変化があまり感じられないというコメントを受けて、まずは一番わかりやすい強弱を変化させることから取り組んでみたいと思っている。そこから徐々にフレーズやテンポなどにも変化を付けていきたい。

〇自分の歌唱を客観的にとらえるために、録音して振り返ることも重要であると考えている。

C:私はテンポ通りに弾いているつもりでも、歌が先走ったピアノを弾いていることに気づきました。今後の自習活動ではピアノと歌を分離して練習したりすることが大切だと思いました。

### 【結果と今後の課題】

他の受講者からの感想や意見を練習や自主学習に反映しようとする姿勢が養われ、他者との感性の違いや自分の表現方法で補わなければならない点への気づきが認められる。しかし、具体的改善方法について、知識や経験の不足から踏み込んだ意見に至らず、授業者からの提案が中心となる傾向が認められる。授業終了時のアンケート結果から、指導者とし力量不足と感じている内容や具体的課題として以下の項目が挙げられた。

- ①発声や他言語の発音の仕方
- ②生徒のわかりやすい指導の仕方
- ③表現方法
- ④自分の声種以外の発声・歌唱指導法
- ⑤範唱の能力

DP 対応調査(4名中3名が入力)の結果では、授業のために自発的に読んだ書籍・論文の数は平均 1.3 冊、授業準備のために 1 週間に費

やした時間は2.8時間、それ以外に自主的に費やした時間は平均1.25時間となっている。自発的に読んだ書籍・論文がないと回答した受講者はいなかったが、自主的な学びの姿勢が十分に養われたとは言い難い現状である。表現の礎となる技術の修得は一朝一夕に成るものではない。練習の積み重ねが求められるだけに、課題を明確化し、表現意欲を高めることができたとしても、このことに対する認識を育成することの難しさを痛感した。

### 3.「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

授業終了時に実施した記述式アンケートより

#### 【設問】

本授業で学んだ内容を授業以外の場で役立ったことがありますか？あれば、例をなるべく全て書いて下さい。

#### 【回答】

この設問への回答は、4名の受講者の内2名のみが経験を有していると回答しており、その内容は以下のとおりである。

- 合唱指導
- 声楽独唱の伴奏
- 中・高等学校の合唱のピアノ伴奏
- 市内の合唱団のピアノ伴奏
- 大学サークルのピアノ伴奏

#### 【結果と今後の課題】

受講者の殆どがピアノを卒業研究に選んでおり、得意分野のピアノを媒体として社会と繋がっていることがわかる。本授業で学んだ内容が役だっているという認識は、歌のピアノ伴奏という点から見出してくれている。授業者として喜ばしい結果であるが、前項で示した受講者の課題と感じている内容の解決が、ピアニストとしての活動から学校教育現場や社会における音楽指導者や支援者として活動する自信に繋がることであると捉え、歌唱領域におけるスキルアップを受講者が更に感じることができるよう授業改善を行っていきたい。

## IV 終わりに

入学時の調査において、歌に対する苦手意識や歌を指導することに対する不安を抱いていた学生が、本授業を専攻生4名全員が受講してくれていることは、音楽科教育における声楽領域の重要性を感じているものと受け止

めたい。また受講者全員が本授業の到達目標として弾き歌の充実を挙げた。本授業では、自分の得意とする声域のみならず、自分の声種と異なるパートや男声パートの歌唱演習と歌唱指導法を授業内容に組み入れ、音取りのための弾き歌いのポイントなど、教育現場を想定した指導を行うなどの工夫を行った。しかし、授業者の力量不足もあり、DP対応のアンケート調査の結果を見る限り、本授業に対する自主的学びの姿勢が十分に養われたとは言い難い結果となった。授業者は自主的学びの育成は大学教育の根幹に関わるものであり、生涯学習に繋がる重要な姿勢であると考えている。今後も多角的視点から授業改善を行う必要を痛感している。